

佐々木宏幹先生のご退任を惜しむ

佐々木宏幹先生が、定年を迎えられ、本学を去られることになった。大学の顔として常に私どもの中心にあつて、精神的な支えとなつてこられた佐々木先生、先生がいらつしやらない駒澤大学というものは考えることもできないことであつたのに、その先生が退職されるといふ。残された我々には埋めがたい大きな穴が開いてしまつた。先生が長年にわたつて築いてこられた駒沢宗教学を継承発展させることが、果たしてできるものかどうか、心許ない限りである。

先生と私の出会いは窪徳忠先生の総合研究・沖繩調査の折りであつた。先生にとつても、このときが初めてのフィールドワークであつたと聞く。しかし、先生はあたかも調査のために生まれてきたかのように、類い希なる調査の天分をお持ちであり、最初から存分に能力を発揮された。言うまでもなく、先生のフィールドは民間シャーマニズムの研究である。悩み事を抱えるクライアントの間で、口コミで伝えられるシャーマンの存在は、あまり社会の表面に出ているものではない。ところが先生は、初めての地域でも、ホテルで出会つた女性たちなどとすぐ仲良くなり、シャーマンの所在をたちどころに嗅ぎつける。しかも、一、二度の訪問で、シャーマンからも篤い信頼を勝ち取るのである。その技は天才的というほかはない。私はこの調査

の初年度から、役所に勤めることになり、調査のために自由に時間をとることができない身分になってしまった。調査メンバーと行動を共にすることができず、先生と話をする機会もほとんどなかった。にもかかわらず、先生は私のことを心に留めておいてくださり、後年、私を駒澤大学に招いてくださった。情の篤い方である。

私の人生では、かけがえのない三人の先生との出会いがある。それは脇本平也先生、柳川啓一先生、そして佐々木宏幹先生である。私が本学に奉職した時には、佐々木先生も私もまだ四十代であった。授業や教授会が終わってから、一寸一杯飲もうかということになり、ほんの少しだけ飲み屋に立ち寄ったつもりであっても、学問の話を皮切りに次から次へと尽きせぬ話題が湧き出でて、まことに楽しい酒になってしまい、気が付いてみると夜が白々と明けていたということも、数え切れないほどであった。酒の上でも気配りの人であり、飽きることなく楽しませてくださったのである。ただ、酒がまわると電話で人を呼び出すという妙な癖があり、夜中の二時、三時に私の女房や娘も呼び出されたことがある。しかし、彼女たちも佐々木先生からの呼び出しには、あまり常識的とは言えない時間帯であるにもかかわらず、喜々として駆けつけた。二人とも先生の大ファンである。

先生の学問については、あらためていうまでもなく、シャーマニズム研究の第一人者である。もちろん、わが国の宗教の根底にシャーマニズムがあることを指摘した研究者は先生がはじめてではない。小口偉一、堀一郎、桜井徳太郎など、先学の数も少なくはない。しかし、先生ほどシャーマニズムに焦点を当て、そこからあらゆる宗教現象を説明しようとした研究者はいないといって良からう。単に大伝統と小伝統を区別して、民間習俗の中のシャーマニズムを説明することにとどまるものではなかった。仏教やキリスト教とい

う大伝統の中にも、シャーマニズムの要素があることを指摘して、やがてブリーストリーシャーマン・ダイコトミーという枠組みで、すべての宗教現象を読み解くという一般理論の構築を試みられた。その段階では、私は果たしてそれですべての現象を位置づけられるのかどうかとの疑念を先生に申し上げたものである。特に岸本先生のいう希求態、沈潜態、融合態などの宗教的態度をどのように位置づけるのか、これらも包摂できるのかどうか、十分に理解できなかったからである。しかし、後年にはさらに進んで、大宗教の教理的次元と民衆のアニミズム的信仰の次元との相互影響、ダイナミズムにこそ宗教があることを明らかにされた。仏教教理上の「仏」と民衆的「^{たま}霊」信仰と、それをつなぐ「ホトケ」の概念を明らかにすることで、宗教的教理の次元と潜在的な民衆的信仰の次元を行き来する、宗教というものの実態を解明された。先生は決して仏教教理の専門家のような顔はなさらないが、寺院のご出身であり、仏教の教理や寺院の実態にもよく通じておられる。そのような幅の広い素養の上で、成し遂げられた大きな業績であると思われる。

先生には誰がつけたのか「逃げの佐々木」というニックネームがある。およそ「長」という名の役に就くことからは、徹底的に逃げた。宗門の出身で、大学の名を高からしめる大きな業績を上げた先生には、当然の事ながら多くの人が、学部長、そして学長になってくださることを期待した。事実、副学長就任への強い要請もあった。しかし、先生は何処までも「逃げた」のである。ローテーションで回り持ちの教室主任も、呆れるほどに様々な理由をこしらえて逃げを図ったが、これだけは逃げ切れずに一年二年だけ主任を務められた。名主任として、ときばきとその役割を果たされた。その方面の能力は十分にお持ちなのである。逃げの佐々木といっても、何でも逃げていたわけではない。大学行政などの役職は徹底的にさけられたが、学会の理事など、こと学問に関する役職は積極的に引け受けておられた。あくまで、学問一筋に明確な価値観を

お持ちであったのである。

先生の思い出は尽きないが、そろそろ紙数も尽きてきた。最後に一言、独身を通された先生の健康が気がかりである。決して「独身主義ではない」と先生は仰有り、若かりし時の女性の思い出話もお聞きしたが、私は、お寺を捨ててシャーマニズム研究への道を選んだ先生として、出家に劣らぬ身の持しかたを守る気持ち^がが心の奥底にあるように感じている。ただ、晩年を迎えようとするこれからの身の回りを見てくれる人は是非見つけていただきたいと思っている。そして何時までもお元気で、至らぬ後輩どもを見守っていただきたい。

(洗 建)